

1950年代における中国とモンゴルの文化交流

—1953年のモンゴル人民共和国芸術団の訪中公演を事例に—

ホ ル

はじめに

近年、中国内モンゴル自治区では、老若男女を問わず多くのモンゴル族が、隣国であるモンゴル国の歌や舞台劇、そしてテレビ番組を、インターネットや携帯アプリ、テレビなどを通して積極的に受容する光景がみられる。また実際に、モンゴル国の歌手や劇団が内モンゴルを訪問し、コンサートや舞台劇を通して文化交流がおこなわれている。このような光景は、同じ民族の芸術文化を鑑賞するという観点からみると、珍しいことではないだろう。しかし、同じ民族でありながら、両国のモンゴル民族の文化交流は、常に中国とモンゴル国の外交関係に左右され、成り立っているのである。

中国とモンゴル国は近数十年、良好な関係を保っているが、それまでは長く複雑な歴史をたどってきた。モンゴル人民共和国は、国民政府から「独立」を承認された後、国共内戦を経て、中華人民共和国と1949年に国交を締結した。一方、1950年に中国とソ連の間では「中ソ友好同盟相互援助条約」締結により、軍事的同盟関係が確立され、それを機に、ソ連からの経済、技術的援助が開始された。新中国では国家建設、貿易面が進展し、ソ連と中国、そして、ソ連の「衛星国」と呼ばれたモンゴル人民共和国の間では良好な関係が築かれた。しかし、1960年代初期頃から中ソ対立や「文化大革命」により、中国とモンゴル国の関係は、約30年間停滞状態に置かれた。1980年代後半、とりわけ、1990年代から関係は徐々に修復され、和解し現在に至っている。

本稿では、1950年代、中国とモンゴルの関係がともに社会主義国として友好的な外交関係を構築したのち、両者のあいだで進められた文化交流について明らかにすることを課題とする。その過程において、両者の交流は、中国のなかでもとりわけ、内モンゴルの人々に大きなインパクトを与えたが、本稿では、国境を跨るモンゴル民族の芸術交流がどのようにして始まったのか、また内モンゴルの文化事業にどのような影響をもたらしたのか、考察を行いたい。

まず、中国とモンゴル両国関係史に関する先行研究としては、中国、モンゴル国、日本でそれぞれ研究が進められてきた。まず、全体的な流れをまとめた研究として、藍美華（2000）を挙げておきたい。藍美華の研究は、1950年代に中蒙関係が良好であった背景について、中国がモンゴル人民共和国に多大な経済的援助を行い、影響力を強めつつあったこと、また、モンゴル人民共和国側も、中国との外交を通して、ソ連との依存関係を打破し、実質的な独

立を望んでいたことを説明する¹。また、Ч.ダシダワー、Ч.ボルド（2015）は、1950年代以降、中蒙間の共同事業に貢献した周恩来（中華人民共和國政務院総理兼外交部部長）をとりあげ、1950年代に両国の間で結ばれた条約や、モンゴルにおける中国の労働者の建設事業などを事例に、1960年代までの両国の経済的な協力関係が明らかにされている²。さらに、アルタントゥグス（2017）は、中国建国以降、とりわけフルシチョフ政権時代、中蒙間の貿易が増加し、中国がモンゴルの要望に応じて無償援助を行い、多くの施設やインフラを整備したことを論じている³。

以上の研究からは、1950年代の中国とモンゴル人民共和国は、社会主義陣営の枠組みの中で、中国側からモンゴルへ多大な経済援助があり、友好関係が築かれた時期であったといえよう。一方、同時期の内モンゴルの状況に関しては、二木博史（2002）、ボルジギン・フスレ（2004）、（2017）の研究が指摘するように、1945年に第二次世界大戦が終結したさい、内外モンゴルの統一の動きがおこったものの、1949年に中華人民共和國が建国すると、内モンゴルは中国領域内に収められ、統一は不可能になった⁴。1940年代後半から、内モンゴルの知識人のなかでは、モンゴル人民共和国から文化や教育を受容する動きがみられ、また、同じ時期、内モンゴルでは様々な文化的な事業が試みられた。そのなかでも、研究が進んでいるのが言語政策である。これに関する研究は、テグス（2008）、（2009）、フフバートル（2014）などの研究を挙げておきたい⁵。一方、芸術や音楽の交流については、研究はさほど多くない。まず、張勁盛（2014）は、中国とモンゴル国の馬頭琴音楽の文化交流史研究を検討するなかで、内モンゴル文工団⁶初代の馬頭琴奏者サンドゥーレン（桑都仍）（1926-1967）が、

1 藍美華『澤登巴爾時期外蒙與中共的關係』蒙藏委員会、2000年、21-33頁。

2 Ч. Дашдаваа, Ч. Волд, Жоу Энлай ба Монгол орон, Улаанбаатар, 2015.

3 敖坦「中蒙経済関係と蘇聯影響：1949-1964」吉林大学文学院博士論文、2017年5月。

4 二木博史「ボヤンマンダフと内モンゴル自治運動」『東京外国語大学論集』第64号、2002年11月。ボルジギン・フスレ「内モンゴル人民革命党に対する中国共産党の政策（1945～1947）」『相關社会科学』第13号、2004年3月。ボルジギン・フスレ「1950年前後の中国・モンゴル関係における内モンゴル」『モンゴルと東北アジア研究』第3号、2018年3月。

5 テグス（2008）、（2009）は、1940年代末～1950年代、内モンゴルの知識人の間で、モンゴル人民共和国から近代語彙の「借用語」を取り入れる活動があったことを明らかにする。フフバートル（2014）は、モンゴル人民共和国の文学が、内モンゴルのモンゴル語文章語の形成に貢献したことを指摘し、またモンゴル人民共和国の国語教育の基礎である文法書が内モンゴルに導入されたことを論じている。（テグス「1950年代中国におけるモンゴル語の借用語問題」『言語社会』第2号、2008年3月および、テグス「統一文字への夢－1950年代中国におけるモンゴル語のキリル文字化運動」（ユ・ヒョヂョン、ボルジギン・ブレンサイン編『境界に生きるモンゴル世界－20世紀における民族と国家』八月書館、2009年3月）、フフバートル「内モンゴルにおける「現代モンゴル語」の形成過程とその政治的側面－モンゴル人民共和国からの影響に焦点を当てて－」『学苑』第883号、2014年5月を参照。）

6 現在の内モンゴル歌舞団で、1946年に結成当初の名称は内モンゴル文工団であった。歌やダンス、演劇をする団体である。詳しくは、本論文の3-3で述べる。

1950年代にモンゴル人民共和国へ行き、そこで演奏法を学んだことについて触れている⁷。また、モンゴル国の研究者B.デルゲルマー（2015）は、1953年の蒙中間の芸術文化交流を取りあげ、これらの事業が両国間の相互理解、友好を深める役割があったことを指摘しているものの、概略にとどまっており、モンゴル国と内モンゴルの交流の実態を明らかにすることが本稿の主要な課題でもある⁸。

このように、先行研究から明らかにされているのは、まず、1940年代後半から50年代にかけて、中国とモンゴル人民共和国のあいだで、外交関係が樹立され、モンゴルに対する経済援助が実施されたこと、つぎに、その時期に、モンゴル人民共和国と内モンゴルのあいだで文化的交流が開始され、そこでは、内モンゴルの知識人がモンゴル人民共和国の学術や芸術文化を積極的に取り入れていた点である。しかしながら、芸術文化事業—音楽や踊り、演劇に関する研究は、概略的なものを除いて、これまでほとんど検討されてこなかったのが現状である。その理由について、1960年代、中国の「文化大革命」により、中蒙両国の芸術文化交流がすべて中断したからと考えられる。また、紙媒体で残る文学や辞書などと異なり、楽器や動作を通して、表現する音楽や踊りなどの文化事業は記録に残りにくく、さらに、変化しやすい複雑な性格を持っていたことも、その理由のひとつであろう。しかしながら、1953年に中国で行われたモンゴル人民共和国芸術団のパフォーマンスは、中国、とりわけ、内モンゴルの人々に大きな影響を与え、その後の内モンゴルの芸術文化にも影響がみられる。

そこで本稿では、以上を踏まえて、中国における両国間の初の大規模な文化交流事業、すなわち1953年のモンゴル人民共和国芸術団の訪中公演の実態について検討したい。そのため、当時の新聞『人民日報』、『光明日報』、『内蒙古日報』、『上海新民報晩刊』や内モンゴルの新聞“Öbür mongyul-un edür-ün sonin”（『内蒙古日報』モンゴル語版）、そしてモンゴル人民共和国の新聞“Үнэн”（『ウネン』）などを利用する。また、モンゴル人民共和国の芸術団と同行した、内モンゴルの著名な詩人、ナ・サインチョグトが記した日記もあわせて検討する⁹。なお、日記の内容は、後に“Na.Sayinchoytu-yin бүрин жокйял (1-8)”（『ナ・サインチョグ

7 張勁盛「中蒙两国馬頭琴音楽文化交流史與現状調査分析」『音楽伝播』第3期、2014年3月。

8 Б.Дэлгэрмаа “Шинэ мянганы Монгол-Хятадын урлагийн ажиллагаа”（中蒙関係研究編委会著『中蒙関係研究（一）』内蒙古出版社、2015年）、pp.314-316。

9 ナ・サインチョグト（1914-1973）（原名：サイチンガ）内モンゴル中部チャハルのショローン・フフ（正藍）旗出身、1937年に徳王の蒙古連合自治政府から日本に留学生として派遣され、1942年に東洋大学教育学科を卒業した。1945-1947年モンゴル人民共和国に留学し、モンゴル人民共和国の作家や政治家などとも深い交流を結んだ。また、日本やモンゴル滞在中、多くの詩を発表するなど、内モンゴルを代表する近代文学者でもあった。（フフバートル「内モンゴルにおけるモンゴル人民共和国文学の受容—20世紀前半のモンゴル語定期刊行物の資料を中心に—（下）」『日本モンゴル学会紀要』第45号、2015年3月、および都馬バイカル『サイチンガ研究』論創社、2018年参照。）日記の記録は、Na.Sayinchoytu, Na.Sayinchoytu-yin бүрин жокйял (4), Öbör Mongyol-un Arad-un keblel-ün Qoriy-a, 1999, pp.118-217を参照。

ト全集』全 8 巻) に収められたが、これは中国とモンゴル国の文化交流史を探る上で貴重な資料と考えられる。なお、ナ・サインチョグトは、当時内モンゴル人民出版社に勤めていたが、どのような経緯で訪中公演に同行したのかは、明らかではない。ただし、日記の序言には、「芸術団と共に広大な祖国を巡回する良い機会を得られた」と書かれていることから、公式的に接待役として選抜された可能性がある¹⁰。サインチョグトは、モンゴルへの留学経験があり、内モンゴルの文化事業にも携わっていたため、通訳としても適任であっただろう。

本論文では、上記の先行研究や資料をもとに、内モンゴルにおける芸術文化事業が形成されていく過程において、モンゴル人民共和国から内モンゴルへの文化事業、とりわけ、音楽や踊り、演劇に影響をもたらした点に着目して、検討していきたい。

1 中国とモンゴル人民共和国の文化交流に至る背景

1-1 中ソ関係とソ蒙関係

1949年10月、中華人民共和国を樹立した中国共産党は、ソ連をモデルにした社会主義の体制を取り入れた。さらに12月、毛沢東は初の外遊先としてソ連を訪問し、スターリンと会見したが、このような、中国側の積極的な働きかけにより「中ソ友好同盟相互援助条約」が結ばれ¹¹、下記のような条約が交わされた。

同条約の第一条には、「締約国のいずれか一方が日本または日本の同盟国から攻撃を受けて戦争状態に入った場合は、他方の締約国は全力をあげて軍事上およびその他の援助を与える。」と記されており、さらに第五条「中ソ両国間の経済、文化関係を発展させ強化し、相互にあらゆる可能な経済援助を与え、かつ必要な経済協力を行う」ことが明記された¹²。このような条約が交わされた背景には、中国共産党が、建国以前からソ連の援助が、(一) 経験の面での援助、(二) 技術の面での援助、(三) 資金の面での援助になりうることを指摘し、その結果、中国がより早く社会主義へと進めるのに役立つと考えていたことがある¹³。

一方、モンゴル人民共和国とソ連は、ソ連成立以前から関係が深かった。1921年、モンゴル人民革命のさい、モンゴル側はソヴィエト赤軍から支援を受け、1921年には「ソ蒙友好相互協定」が交わされた¹⁴。さらに1924年にモンゴル人民共和国が成立すると、モンゴルはソ連

10 前掲 Na.Sayinchoytu, Na.Sayinchoytu-yin bürin jokiyal (4), 1999, p.118.

11 石井明『中ソ関係史の研究(1945-1950)』東京大学出版会、1990年、248-257頁および、二十世紀中国読本編委会『二十世紀中国読本』中国経済出版社、1997年、1062-1076頁。

12 日本国際問題研究所中国部会編『新中国資料集成』第3巻、日本国際問題研究所、1969年、54頁。

13 石井明『中ソ関係史の研究(1945-1950)』東京大学出版会、1990年、230-231頁。

14 蘇聯科学院、蒙古人民共和国科学委員会編『蒙古人民共和国通史』科学出版社、1958年、281-282頁。

のみを、唯一の同盟国として認めた¹⁵。ソ連は、1929年締結の「ソ連とモンゴル人民共和国の關係の基本的な原則に関する協定」を機に、モンゴルに対して、経済、科学的医学、教育・文化・科学面にわたる全般援助を開始するなど、次第に影響力を増していった¹⁶。1932年、日本が中国東北に「満洲国」を設立すると、ソ連のモンゴルに対する内政干渉は強まり¹⁷、1936年、平和安全保障のため、両国間では「相互援助議定書」が交わされたが、その内容は次のようなものであった。「ソ連とモンゴル人民共和国のどちらかの領土が第三国の侵略的な威嚇を受けた場合、締約国双方はその状況に基づき計画を立て、安全を守るためにあらゆる対策を講じ、そしてお互いに援助を与えること。軍事援助を含む¹⁸。」この条約は1946年には有効期限を迎えたが、引き続き更新された。両国の關係は、つねに相互の防衛を図ることが目的であり、モンゴルにとって社会主義国家建設におけるソ連の支援は多大であった。

1-2 中国とモンゴル人民共和国の文化交流

中国とモンゴル人民共和国は、中華人民共和国の建国とほぼ同時に国交を樹立し、翌1950年7月には相互に大使の交換を行った¹⁹。このように建国間もない中国と、モンゴル人民共和国の關係が円滑に進展したのは、ソ連の存在なしには語れないだろう。この時期は、東北アジアにおいて、ソ連を中心として、中国、モンゴルがともに社会主義陣営を基盤として、友好と協力關係を築いた時期である²⁰。1952年10月、モンゴル人民共和国の首相ツェデンバル政府代表団が北京を訪問し、両国の間で「中モ経済文化協力協定」が結ばれた²¹。その内容は以下の通りである²²。

第一条、両国は経済、文化、教育の分野においてモンゴル人民共和国と中華人民共和国の間の協力關係を確立、発展、強化することに合意する。

15 モンゴル科学アカデミー歴史研究所編、二木博史、今泉博、岡田和行訳『モンゴル史1』恒文社、1988年、162-225頁。

16 同書、271-273頁。

17 前掲 藍美華『澤登巴爾時期外蒙與中共的關係』、8-13頁、マンダフ・アリウンサイハン「モンゴルにおける大粛清の真相とその背景—ソ連の対モンゴル政策の変化とチョイバルサン元帥の役割に着目して—」『一橋論叢』第126巻 第6号、2001年12月。

18 前掲 蘇聯科学院、蒙古人民共和国科学委員会編『蒙古人民共和国通史』、320頁。

19 前掲 藍美華『澤登巴爾時期外蒙與中共的關係』、22-23頁、中蒙聯合編委會編『中華人民共和国與蒙古国国家關係歴年編年』、Арвай Бархан、2014年、15頁。

20 鯉淵信一「モンゴル政治におけるソ連の地位：その展開と将来の展望」、『アジア研究所紀要』第8巻、1991年。

21 前掲 藍美華『澤登巴爾時期外蒙與中共的關係』22-23頁、前掲 中蒙聯合編委會編『中華人民共和国與蒙古国国家關係歴年編年』、17-18頁。

22 前掲 Ч. Дашдаваа, Ч. Волд, Жоу Энхлай ба Монгол орон, Улаанбаатар, р.34.

第二条、この協定に従い、協定を実現するために両国における経済、貿易及び文化教育関連部門の間でそれぞれ特定の協定を締結してよい。

第三条、この協定は承認日から有効であり、その有効期間は十年である。承認書はウランバートルで交換される。

両国のあいだでは、この条約に従って、1952年12月29日に承認書が交わされ²³、交流が活発化された。また、条約締結に先んじて、1952年9月末にモンゴル人民共和国において、「モンゴル・中国の友好の10日間」（中蒙友好旬）が開催されている。さらに1953年になると、モンゴル人民共和国から約100人規模の芸術団体が中国を訪問し、約50日間にわたる巡回公演が行われることになった。蒙中間の文化交流の進展を明らかにするために、つぎにこのモンゴル人民共和国芸術団（以下原文以外モンゴル芸術団と省略する）の派遣について検討することにしたい。

2 モンゴル人民共和国芸術団の訪中記録

2-1 モンゴル芸術団の訪問活動

まずモンゴル芸術団の訪問期間の日程、および主な行事について確認することにした。1953年4月16日、ジャンバルドルジ団長率いるモンゴル人民共和国の芸術団が北京に到着した。北京駅には、中央人民政府文化部長の丁西林をはじめとして、政府の幹部、文化芸術界の人々、首都文芸の関係者、労働者、学生の代表約1,500人が集まり、芸術団の訪問を歓迎した²⁴。さらに駅では歓迎会が行われ、中央人民政府文化部長の丁西林は以下のように祝辞を述べた。

「この度モンゴル人民共和国芸術団の訪問公演を通して、私たちは民族芸術の大きな成果を拝見し、更に理解を深めるでしょう。また、中蒙両国の文化芸術の交流を進展させ、両国の世界平和を守る事業での友好協力関係を一層深めるでしょう。」と表明した²⁵。これに対し、モンゴル人民共和国芸術団の団長ジャンバルドルジは「私たちは友である中華人民共和国の得られた成果に対して祝福いたします。（中略－引用者、以下省略）両国は固い友情で結ばれています。（中略）私たち芸術団は代表者として祖国の新しい芸術を中国人民に紹介し、また中国の大きな成果を実際に見ることをとても光榮に思います。」と述べた²⁶。

当時のことを団員の功労芸術家で歌手であったチョグジルマーは1989年の回想録で「私た

23 前掲 中蒙聯合編委会編『中華人民共和国與蒙古国国家關係歴年編年』、18頁。

24 『人民日報』1953年4月17日付。

25 『人民日報』1953年4月17日付。

26 同上。

ちを、まるで国家主席を出迎えているように、(中略)人々が列になってその真ん中を通って歓迎されたわ。」と述べている²⁷。このように、中国で盛大に歓迎された背景には、中国の外交工作の方針が関わっていると考えられる。建国後、1949年10月に、周恩来は、外交工作について次のように述べていた²⁸。

連合国において、現在すでに九カ国が我が国を承認している。アルバニアを加えると、十カ国になる。この他に資本主義国家も我らを認めてくれるかもしれない。(中略)しかし、国によって政治、民族、宗教、言語、風習などの相違が存在する。(中略)人の考え方はそれぞれ異なる。まして国家、民族レベルとなると言うまでもない。(中略)我らは如何にして関係を改善すべきかを研究する必要がある。友好国家だからといって軽はずみに振舞ってはならない。

周恩来が述べるように、建国当初から中国は他国に認められることを重視していた。当時、中国は建国間もない時期であり、国際的に承認される必要があった。ロシア語翻訳家の師哲によると、毛沢東は、建国以前から、他国に国家として承認されるか否か危惧していたという²⁹。それゆえ共産党は、ソ連をはじめとする社会主義国家を非常に重視していた。

モンゴル芸術団の公演は4月18日から始まり、連日、芸術団によってモンゴルの音楽、踊り、曲芸のパフォーマンスが行われ、いずれも観衆から高い称賛を受けたとされる。さらに4月22日の北京懷仁堂での公演には、毛沢東主席をはじめとして、中央人民政府副主席朱徳、劉少奇、李済深、政務院総理周恩来、副総理董必武、郭沫若、黄炎培、鄧小平など、中央人民政府の要人や、各部門首長、北京著名作家、音楽家、舞踊家、美術家などが出席した³⁰。また、海外からの来賓として、中国に駐在するモンゴル人民共和国大使ジャルガルサイハン、ソ連大使クズネツォフ、そしてモンゴル人民共和国やソ連の外交官らが参加した³¹。モンゴル人民共和国の新聞『ウネン(“Үнэн”)]に記載された、団長オユンの報告によると、当時、毛沢東は、「我が国の人々は皆さんの素晴らしい芸術を見ようと公演を楽しみにしています。皆さんは我々両国における今後の友好関係を一層深めることとなるでしょう。私たちはあなた方からたくさんのものを学んで、見本にします。皆さんは、我が国を巡回公演して、国際主義を最後まで宣伝してくれることでしょう。」と述べたという³²。同日の公演後に、モン

27 前掲 Б.Дэлгэрмаа “Шинэ мянганы Монгол-Хятадын урлагийн ажиллагаа”, р.315.

28 前掲 二十世紀中国読本編委会編『二十世紀中国読本』、1075頁。

29 同書、1072頁。

30 『人民日報』1953年4月23日付。

31 同上。

32 本来団長は、ジャンバルドルジであったが、北京に到着後、病気のため入院し休養をとったため、オユンが代わって団長を務めた。(“Үнэн” 1953年6月16日付)。

ゴル芸術団を歓迎して、周恩来をはじめとする中央政府の幹部により懇親会が開かれた³³。中国政府は、モンゴル芸術団の北京到着以降、最高級の接客対応をとったが、これは現在では類を見ない出来事であろう。

1953年の時点では、中国では、外交が徐々に展開され、自国をアピールし、外交関係を発展させていくことを重視していた初期の段階であった。張登徳（2014）によると、1950年代の中国は外国との文化交流を外交政策の中で重視し、国交を結んだ国とは公式的に、国交がない国とは民間形式で文化交流を展開していたという³⁴。中国がこのような他国との交流を深めた背景には、良い関係を築き、新中国のイメージを確立する意図があったようである³⁵。たとえば、1953年の『人民日報』などには中国がポーランド人民共和国やチェコスロバキア共和国、朝鮮民主主義人民共和国などの芸術代表団らを招待していることが確認できる。

以上の点を踏まえると、モンゴル人民共和国の芸術団に対しても、中国は同様の外交政策を採用したのかもしれない。いずれにしても、国家のリーダーや中央政府の幹部らだけでなく、大勢の市民を動員して盛大に出迎えたことは、中国とモンゴル人民共和国との友好関係、および社会主義国家としての団結を強化することにつながったであろう。それは後述するナ・サインチョグトの日記でも確認できる。

その後、5月1日に天安門広場で開催された、五十万人規模の参加者による「国際労働節」のパレードにモンゴル芸術団は招待された³⁶。モンゴル芸術団の代表者らは、天安門の西側の楼台からソ連や友好国家諸国の代表者らとともにパレードを観賞した³⁷。この時の状況について、ナ・サインチョグトの日記の中には「我らの幸福な生活への道を切り拓き、希望に満ちた未来を照らしてくれた最愛なる指導者への愛や尊敬が込められた真摯な気持ちの高ぶりといえる「毛沢東万歳！」の掛け声が多民族の言語で絶え間なく響きわたっていた」と記されている³⁸。このことばはまさに、当時の社会主義建設に励む中国の民衆の思想を反映したものなのであろう。民衆は皆、毛沢東に明るい未来への希望を託し、活気に溢れていた様子がうかがえる。モンゴル芸術団の全団員もパレードに参加し、三カ国の指導者として毛沢東、ツェデンバル、マレンコフの肖像を揚げ、ポーランド人民共和国、朝鮮民主主義人民共和国の芸術代表団らと共に天安門の前を行進した³⁹。その後、団員のチョグジルマーと厩ダムディンスレンの二人は、モンゴル人民共和国を代表して毛沢東に献花し、握手を交わした⁴⁰。

33 『人民日報』1953年4月23日付。

34 張登徳「20世紀50年代中国对外文化交流的特点」『當代中国史研究』2014年第6期。

35 同上。

36 前掲 Na.Sayinchoytu, Na.Sayinchoytu-yin būrin jokiya (4), 1999, pp.143-144.

37 同書, pp.144-145.

38 同書, p.146.

39 前掲 Na.Sayinchoytu, Na.Sayinchoytu-yin būrin jokiya (4), 1999, p.147, p.152.

40 『人民日報』1953年5月3日付、前掲Na.Sayinchoytu, Na.Sayinchoytu-yin būrin jokiya (4), 1999, p.147.

当時の状況について、チョゲジルマーは「彼らは私たちのことを、天安門にあがった初めての外国の人だと話していた。その時、毛沢東主席は私たちの手を握り、（中略）通訳がいなかったため、何を話されたのかわからなかった。」と述べている⁴¹。代表者の二人は席に戻ると、団員たちから毛沢東を触った手と感心され、皆一人ずつ彼らの手を触った⁴²。このように盛大に行われた「労働節」は、自国の民衆のみならず、外国から招いた要人に、毛沢東や中国の偉大さを改めて認識させるという意味をもった。また他の社会主義国から招いたゲストが持つ新中国に対するイメージを向上させようとする政策意図があったと考えられる。

実際に、モンゴル芸術団にとって、この労働節を含めて、北京滞在の18日間は、中国滞在中のなかでも一番印象的だったようである。なぜならば、芸術団は、その後他の都市を巡回するあいだにも北京にいた時を思い出しては言葉にしていたからである⁴³。たとえば、団員の音楽家B.ダムディンスレンは、汽車の中で「北京は美しい都会、世界の他どこにもない独特な特徴のある素敵な町」と評価している⁴⁴。また、ナ・サインチョグトの記録によれば、団長のオユンは、5月17日広州を離れる夜、駅に向かう小道で「社会主義の道を歩み発展しつつある大国の首都北京にいる間私たちはたくさんの素晴らしいものをみた。北京の何もかもが良かった。すべてに対して満足した。（後略）」と話したという⁴⁵。また、団員の多くが皆「北京はこの先ずっと私たちの心に残る町だ」と記録されている⁴⁶。

こうしたモンゴル側の反応は、北京で大勢の人に出迎えられ、毛沢東と面会したことや、友好国家の仲間たちと交流し、盛大な労働節で重要なゲストとして招かれたことなど中国側の振る舞いが大きく関連しただろう⁴⁷。したがって、中国側の北京での接待は、モンゴル芸術団の好感を得ることにつながり、その後の両国の文化交流を一層緊密なものとする端緒となったのである。

その後、モンゴル芸術団は約400名の政府機関の人、芸術関係者らに見送られて⁴⁸、北京を離れ、南京、上海、杭州、広州、武漢の順に大都市を回った。詳しくは表1の通りである。

41 Ц. балдорж, Түмэн хүрээлж төр соёрхсон гэр бүл, Улаанбаатар, 2003, p.183.

42 前掲 Na.Sayinchoytu, Na.Sayinchoytu-yin бүрэн jokiya (4), 1999, p.147.

43 前掲 Na.Sayinchoytu, Na.Sayinchoytu-yin бүрэн jokiya (4), 1999, pp.148-154.

44 前掲 Na.Sayinchoytu, Na.Sayinchoytu-yin бүрэн jokiya (4), 1999, p.153.

45 同書, pp.153-154.

46 同書, p.150.

47 同書, pp.150-151.

48 『新民報』1953年5月5日付。

表 1 モンゴル人民共和国芸術団の訪中記録（筆者作成）

到着日	訪問都市	主な日程
4月16日	北京 (公演回数12)	開幕式／毛沢東と面会／周恩来と食事会／芸術関係者と文化交流／労働節の宴会／「国際労働節」／北京大学／故宮／頤和園／中国の伝統芝居（サーカス）
5月5日	南京 (公演回数3)	孫文の記念碑／明の皇帝の陵墓／雨花石の説明
5月8日	上海 (公演回数4)	芸術関係者と文化交流会／染色工場
5月12日	杭州 (公演回数2)	西湖／玉泉／織物工場
不明	広州 (公演回数4)	広州コミュニティ旧址
5月19日	武漢（公演回数2）	国営繊維第一工場
5月23日	帰綏（現：フフホト） (公演回数4)	ハフオンガー、オランフーと面会、食事会／内蒙古歌舞団と文化交流／内蒙古教育庁／内蒙古人民日報社／内蒙古出版社
5月27日	瀋陽 (公演回数3)	工業展覧会場／工業の生産物について説明
5月31日	哈爾濱 (公演回数3)	ソ連の支援によって建設された縄工場／農業大学
6月3日	満州里 (公演回数2)	送別会

（出所）本表は、Sayinçoytu Na. (1999), Na. Sayinçoytu-yin бүрin jökiyal (4), および1953年4月～6月の『人民日報』、『光明日報』、『内蒙古日報』、『上海新民報晩刊』、『Öbür mongγul-un edür-tin sonin』、『УНЭН』を参照して作成した。

芸術団は、中国側から巡回公演の合間に、各都市にある歴史的建築物や自然景観、工場、教育機関などを案内されたが、そのさい、歴史的事柄と絡めつつ史跡が紹介されていた⁴⁹。たとえば、南京では「雨花石」について紹介する時、ここで、かつて共産党と国民党が戦闘をおこない、多くの戦士たちが人民の自由のために命を落とした場所と説明された⁵⁰。そのため、近辺の人々は、戦士らを記念してその石を家に持って帰り飾ったという⁵¹。この出来事を聞いたモンゴル芸術団の団員の中には、涙を浮かべた人もいたとされ、こうした点から両国の人々の持つ、政治的イデオロギーが同じであったことが見受けられる⁵²。また、各地の見学を通して、モンゴル芸術団は、中国の歴史、経済建設、教育文化に対する理解を深めたと考えられる。その後、芸術団は、5月23日に内モンゴル自治区フフホト市に向かったが、その詳細に関しては3-1で取り上げる。

49 前掲 Na.Sayinçoytu, Na.Sayinçoytu-yin бүрin jökiyal (4), 1999, pp.163-176.

50 同書, pp.155-157.

51 同書, p.157.

52 同書, p.157.

2-2 モンゴル人民共和国芸術団について

さて、これまでモンゴル芸術団の中国における活動について検討したが、つぎに『人民日報』（1953年4月25日付）、および『上海新民報晩刊』（同5月11日付）をもとに、モンゴル芸術団の構成について、確認することにした。芸術団は、主に音楽、踊り、曲芸の三つの部門から成り立っており、127人の芸術家から構成される。彼らはモンゴル国内では、それぞれ国立音楽ドラマ劇場、または国立サーカス団に所属する団員たちであった。芸術団の主な演目の内容は表2の通りである⁵³。

表2 モンゴル芸術団の主な演目内容（筆者作成）

	上演作品	出演者
合唱曲	「スターリンの歌」 「東方紅」（毛沢東を讃える歌） 「チョイバルサン之歌」 「全世界人民心一条」（毛沢東、スターリンを讃える歌）	
独唱曲	「かわいい我が祖国よ」 「固く団結する世界の人々」（中国「世界人民団結緊」） 「故郷の星」（ロシアの歌）	チョグジルマー（女）
独唱曲	「ドゥムン」（モンゴル長調民歌）	チグミデ ジャミヤン演奏（男）
三重唱	「牧民の試合」	
馬頭琴演奏	「乾杯」 「美しい曲調」	ジャミヤン（男）
バイオリン演奏	「ヘンティー山脈」	チョローン（男）
民謡の歌	「斑模様の馬」 「すべてを祖国に捧げる」	ジャグダスレン（女）
民間音楽	「2曲民間変奏曲」	チョローン（男）
踊り	「ドゥルブド民間踊り」 「モンゴル踊り」 「騎手踊り」	舞踊部
舞台劇	「悲しみの三つの丘」（テーマ：封建主義と戦う若者の自由な恋愛） 「幸福への道」（テーマ：祖国のために戦う戦士、ソ連との絆）	演劇部
サーカス（曲芸）	「バランス組み体操」 「はしご」 「柔軟踊り」 「曲芸」 「綱渡り」 「ハンターと飛ぶ鳥」（芸術パフォーマンス） 「マジック」 「空中パフォーマンス」 「ボールパフォーマンス」	主にサーカス、曲芸部

芸術団の演目内容について資料をもとに、上記の曲目についてまとめると、次の通りである。歌手のチョグジルマーの独唱曲「かわいい我が祖国よ」、「固く団結する世界の人々」、「故

53 『上海新民報晩刊』5月11日付、前掲Na.Sayinchoytu, Na.Sayinchoytu-yin bürin jokiyal (4), 1999, pp.124-129.

郷の星」はそれぞれ、モンゴル語、中国語、ロシア語の歌である。また若手歌手ジャグダスレンの独唱曲「すべてを祖国に捧げる」と歌手チグミデの「ドゥムン」はモンゴル民歌である⁵⁴。ジャミヤンの馬頭琴独奏曲「乾杯」は、団員B.ダムディンスレンの作曲で、「美しい曲調」は、ロシアの音楽家によって創作された曲であるが⁵⁵、張勁盛（2014）は、この「乾杯」の曲が中国に導入され、馬頭琴の必修曲になったと述べている⁵⁶。また、馬頭琴の演奏について、実際に、モンゴル国の著名作曲家ジャンツンノロブは、「内モンゴルと同じ馬頭琴でありながら、全く異なる音色を出し、西洋のクラシック音楽のようでありながら、民族風の音色も入っており、（両者の間では）全く異なる世界のものであった」と分析している⁵⁷。チョローンのバイオリン独奏曲「ヘンティー山脈」は同じくB.ダムディンスレンの作曲である。サーカス（曲芸）については、サーカス団員エルデニツェツェグらの「ハンターと飛ぶ鳥」は、ハンターに打たれた鳥とそれを捕らえるハンターを優雅な動作で表現し、ダンスの動作に取り入れた芸術パフォーマンスである。また、Ж.ダムディンスレンとナチョグらのパフォーマンスとして「バランス組体操」、「はしご」があり、このほかに若手芸人マジグダスレンの軟体芸や、その他のサーカス団員による、巧みなサーカスショーが実演された。舞台劇では、チョグジルマー主演の「悲しみの三つの丘」は若い男女の恋の物語を通して、封建貴族に対する反抗を示し、最終的に自由な恋愛を獲得するストーリーであり、この舞台劇はモンゴルの人々の熱烈な支持を集めた作品である⁵⁸。また、「幸福への道」は、モンゴル人民が祖国のためにソ連軍と共に、日本軍と戦う過程でソ連軍との絆、友情を描いたストーリーである。踊りの項目では、「騎手踊り」、「ドゥルブド民間踊り」や「モンゴル踊り」は、モンゴル人民共和国においてオリジナルに作られたモンゴルの踊りである。これらモンゴル芸術団のパフォーマンスは、モンゴルの伝統的な芸能文化が、ロシアやソ連の芸術や文化の影響のもと、西洋の芸術と融合しながら発展したものであるといえよう。

その背景を考察するために、ここでは芸術団と芸術団に属した芸術家の経歴について説明しておきたい。モンゴル人民共和国では、1920年代初めからロシア人のアマチュア芸術家を通して、19世紀ロシアの優れた演劇作品などに接していたようである⁵⁹。その後、1930年代にソ連から招聘された舞台監督のもと、モンゴルの劇場にプロの舞台俳優育成コースが作ら

54 “ドゥムン”については、詳しい説明は示されていないが、おそらくモンゴル国の“Дөмөн”（走りの良い馬）に該当すると考えられる。実際に、“Дөмөн”というモンゴル長調民歌がある。

55 『上海新民報晩刊』5月11日付。

56 前掲 張勁盛「中蒙両国馬頭琴音楽文化交流史と現状調査分析」『音楽伝播』第3期、103-105頁。

57 “Гэгээн үдэш: Ардын жүжигчин Г. Жамьян”, <https://www.youtube.com/watch?v=EhVoICKsB34> (2021年1月閲覧。)

58 「悲しみの三つの丘」に関しては、木村理子「現代モンゴル演劇史におけるオペラの誕生—なぜ『悲しみの三座山』が国民的オペラになったのか—」（『内陸アジア史研究』第21号、2006年）を参照されたい。

59 モンゴル科学アカデミー歴史研究所編『モンゴル史1』、444頁。

れ、1931年にはその育成コース修了者から成り立つ国立人民中央劇場が設立された⁶⁰。1947年に中央劇場は、音楽ドラマ劇場と改称され、新たに交響楽団が創設された⁶¹。舞踊研究者Г.ドルゴルスレンによると、1940年代にソ連から、ダンスの専門家たちがモンゴルに派遣され、彼らを通して、モンゴル人民共和国では、多くの舞踊振付師が誕生し、新しい踊りが生まれたという⁶²。一方、サーカス団の成り立ちについては、1936年にモンゴルからソ連に、サーカス専門要員を派遣し、1940年にウランバートルで初のサーカス学校が開設されたことで、サーカス芸術が発展した⁶³。モンゴル人民共和国の芸術文化の発展も、やはりソ連の支援の一環であったといえよう。

つぎに、訪中した芸術団のうち、国立音楽ドラマ劇場のメンバーを中心に、代表的な団員を取りあげたい。今回の訪中芸術団の団長を務めるЭ.Оюн（女性：1917–2001）は、1953年の訪中のさい、国立音楽ドラマ劇場の文芸翻訳家、脚本家、劇作家であった。中学校時代にソ連で過ごした経験があり、帰国後、文芸翻訳やソ連の劇場監督B.A.ボレイシヨグのもとで通訳をしていた。その後B.A.ボレイシヨグの教えを受けて、ロシアの古典的歌劇を翻訳し、舞台劇に取り組み始め、脚本家として活躍するようになる。また経験を積みながら、劇作家としても多くの作品を手掛けた⁶⁴。

芸術監督Л.ワンガン（男性：1920–1968）は、中学を卒業後、ソ連の労働者の職業訓練学校に留学したが、1937年に父が虚偽の政治犯罪で有罪判決を受けたため、退学を余儀なくされ帰国することになった。1939年にソ連でサーカスを学んでいた妹が帰国したため、その影響を受けて、サーカスのクラスでロシア語通訳となった。その後、1946年～1951年まで再びソ連に留学し、芸術高等学校において、ディレクターのコースを専攻し、帰国後は芸術監督となった。彼は演劇の発展に改革をもたらした人物だと評価されている⁶⁵。

Л.Чоогжилмар（女性：1924–）は歌手、女優であり、数々の演劇を演じた。多言語を用い、美しい歌声で人々を魅了する歌手だと称されている。今回の舞台劇「悲しみの三つの丘」、「幸福への道」の主演を演じた⁶⁶。

Б.Дамдинсレン（男性：1919–1992）は、作曲家、指揮者である。モンゴル人民共和国の国歌を作曲した芸術家である。また今回の舞台劇「悲しみの三つの丘」、「幸福への道」の劇中曲を手掛けた。1940年から、ソ連音楽家Г.スミルノフから下記のメンバー、ジャミ

60 前掲 モンゴル科学アカデミー歴史研究所編『モンゴル史1』、445頁。

61 モンゴル科学アカデミー歴史研究所編、二木博史、今泉博、岡田和行訳『モンゴル史2』恒文社、1988年、245頁。

62 Г. Долгорсүрэн, “Монгол ардын бүжиг”, Улаанбаатар, 1962.

63 前掲 モンゴル科学アカデミー歴史研究所編『モンゴル史2』、244頁。

64 Б. Болд, Ч. Болд, “Соёл урлагийн алтан үеийнхэн”, Улаанбаатар, 2014, p.85.

65 同書, p.11.

66 前掲 Б. Болд, Ч. Болд, “Соёл урлагийн алтан үеийнхэн”, 2014, p.119.

ヤン、チョローンらとともに、楽譜の基礎知識や演奏の手法、作曲、編曲の方法を学んだ⁶⁷。

Г.ジャミヤン（男性：1919–2008）は、馬頭琴奏者であり、少年時代に父の影響を受けて文学や音楽を学んだ。1937年に芸術学校に合格し、一年後に国立中央劇場演奏学科に入学した。ジャミヤンは、1940年から本格的に演奏や作曲を学んだが、馬頭琴のすべてのメロディー（長調、短調、古典曲）を完成させることができ、その業績は讃えられている⁶⁸。

Ж.チョローン（男性：1928–1996）は、バイオリニストであり、同じくソ連の音楽家Г.スミルノフから楽譜の知識などを学んだ。1942年からバイオリンを手に取り、翌1943年にブリヤート劇団のН.И.モトリンに、その演奏法を教授された。また今回の公演では、ドゥルブド民間踊りの曲を手掛けたが、モンゴル民歌をバイオリン曲に取り入れ、海外の舞台で広めていったとされる。また前述のБ.ダムディンスレンと同じく音楽指揮者でもある⁶⁹。

この他、サーカス団の団員、Ж.ダムディンスレン（男性）は、前述のチョグジルマーと共に天安門にて毛沢東に花を捧げた代表者であり、サーカスの多くの演目の制作を手掛けた芸術家である⁷⁰。

以上のように、1953年に訪中した芸術家らの多くは、ロシアやソ連の芸術を学んだ経歴を持ち、当時のモンゴルにおいて、最先端で活躍していた芸術家であった。また、彼らは皆、現在のモンゴル国における近現代芸術文化の形成において、その業績が讃えられている人たちである。

67 前掲 Б. Болд, Ч. Болд, “Соёл урлагийн алтан үеийнхэн”, 2014, pp.21–22, p.43.

68 同書, pp.43–44. なお、ジャミヤンの功績については、モンゴル国立公共ラジオテレビ（MNB）番組 “Гэгээн үдэш: Ардын жүжигчин Г. Жамьян (「華麗なる夜－人民芸術家 Г.ジャミヤン」)” のなかで、モンゴル国の著名作曲家ジャンツンノロブが以下のように証言している。ジャンツンノロブは、内モンゴルを代表する馬頭琴奏者のチ・ボラグについて、彼の師匠、サンドゥーレンがジャミヤンの弟子であり、それゆえ現在、広く受け継がれている馬頭琴の理論の原点が、ジャミヤンの教えにある可能性について言及している。（“Гэгээн үдэш: Ардын жүжигчин Г. Жамьян”, <https://www.youtube.com/watch?v=EhVoICKsB34>, 2021年1月閲覧。）

69 前掲 Б. Болд, Ч. Болд, “Соёл урлагийн алтан үеийнхэн”, 2014, pp.161–162.

70 また、サーカス団員ナチョグや、エルデニツェツェグも多くの演目の創作に関わり、モンゴルのサーカスを築き上げた芸術家である。（前掲 Na.Sayinchoyту, Na.Sayinchoyту-yin бүрэн Jokiyal (4), 1999, p.129を参照。）



資料1 (左) お碗を使用した「ドゥルブド民間踊り」(『内蒙古日報』1953年5月23日付)



資料2 (右) 若者の自由な恋愛を描いた舞台劇「悲しみの三つの丘」の一場面。右側が女優チョグジルマーである。(『内蒙古日報』1953年5月23日付)



資料3 馬頭琴演奏 功労芸術家ジャミヤン(『内蒙古日報』1953年5月23日付)

2-3 メディア報道から見る中国側の評価

本節では、公演を鑑賞した中国の人々による評価について見ることにしたい。『新民報』(1953年5月10日付)において、記者の張之江は「忘れがたい一夜—モンゴル人民共和国芸術団の公演記録—」というタイトルで、上海の初日公演について記している。馬頭琴について「“馬頭琴”は、モンゴル音楽の典型的な楽器であり、豊かで広々とした草原のモンゴル人民の気質を表現している。」とし、また、バイオリン曲については「“ヘンティー山脈”のバイオリン曲は私たちの心を浄化し、生活の幸せを感じさせてくれた。」と述べられている。

また、演劇については、以下のように評価している。「(前略) 舞台劇“幸福への道”は、その内容に共感し、1万5千人以上の観衆がとても自然に劇中に入っていった。舞台の上も下も、ただ一つの目標のために戦う同志に感情移入し、完全に一つに溶け込んだ。(中略) 全国規模で経済建設に取り組んでいる中国人民にとって昨晚の公演は忘れがたく、平和維持の共同事業は今後巨大な力を生むだろう。」としている。

フフホト公演の観衆の一人であった、韓蘊は、次のように評価している⁷¹。「芸術団のどの演目も例外なく民族の息吹を満ちし、土の香りを漂わせ、雄壮な気迫漲り、青春のような

勢いに乗っている。(中略) 演目の中で、サーカス、曲芸は観衆が一番興味を持っている演目の一つである。それは中国の各民族の人々が曲芸に対する趣味は長い歴史の伝統を持っているからである。(中略) ポールパフォーマンスでは三人の女性芸術家がパフォーマンスした。1 人が額、歯と両肩に土台となる梯子の足と木製の棒を乗せて、他の 2 人はその上で演技をした。このパフォーマンスは非常にリスクがあるが、重心とバランスをしっかりと操ることができ、偏りがなかった。(後略)」このように新聞には、中国の観衆によるモンゴル芸術団の芸術、とりわけ、サーカスや曲芸の技術、演劇の内容に対して、高い評価が見られたが、一方で、モンゴル民族の芸術に対する評価は一面的であった。これとは対照的に、芸術団に同行していたナ・サインチョグトは北京での初日公演を見て、次のように評価している⁷²。馬頭琴を演奏したジャミヤンについては、「長い歴史の中で小さなゲルの中でモンゴル民謡に使用していた馬頭琴を、今日ジャミヤンの手によって世界の楽器と並んで新しい時代の大きな舞台上、海外のクラシック音楽に用いて、柔軟に演奏した。」また、チョロンのバイオリン曲「ヘンティー山脈」について、「美しいメロディーをととても心地よい音色で演奏した。彼の演出は民族の伝統文化を貫き、且つソ連から導入し、発展させたモンゴルにおける新しい楽器の多大な業績を私たちに見せた。」と記している⁷³。つまり、サインチョグトの文章からは、ただ単に楽器の演奏を聴いただけでなく、民族の楽器である馬頭琴を用いて、クラシック音楽を演奏した点や、海外の楽器を用いて民族曲を弾くといった、モンゴル人民共和国の芸術の「伝統と革新」について注目しているのが読み取れる。これは、先に取りあげた評価とは、視点が大きく異なっているといえるだろう。つぎに内モンゴルにおける反応を検討するために、フフホト公演について見てゆくことにしたい。

3 モンゴル人民共和国芸術団の内モンゴルでの訪問公演、および文化交流

3-1 モンゴル芸術団のフフホト市における公演活動

5 月 23 日午前 9 時にモンゴル芸術団は、内モンゴルフフホト市に到着した⁷⁴。フフホト駅には、芸術関係者、労働者、生徒ら約 800 人が出迎え、教育庁の会長ハフオンガーは次のように歓迎のことばを述べている。

「この度モンゴル人民共和国の芸術団の訪問公演を通じて、私たちはモンゴル人民共和国の民族芸術の成果をより実感できると同時に、祖国を建設するモンゴル人民の偉大なる発展

71 『内蒙古日報』1953 年 5 月 25 日付。

72 前掲 Na.Sayinchoytu, Na.Sayinchoytu-yin büirin jokiyal (4), 1999, p.127.

73 日記には中国語で「提琴」と呼ぶと注釈を施していることから中国や内モンゴルでは、当時はさほど普及していなかったと思われる。

74 Öbür mongyul-un edür-ün sonin 1953 年 5 月 24 日付。

を見届けるだろう。内モンゴル自治区の文学や芸術文化に取り組む人々にとって喜ばしいことは、今回文化芸術の面での交流、基礎学習、経験談などを受け入れ、私たちの事業を向上させる良い機会となるだろう⁷⁵。」

これに対し、芸術団の団長オユンは、「中国とモンゴル両国人民は固い友情で結ばれており、兄弟国家の平和と友情は永遠に続き、日増しに親交を深めることでしょう。中華人民共和国の人民、共産党の皆様は、毛沢東主席の賢明な指導のもと、祖国を繁栄させ、強化させるための第一次五カ年計画を成功させることをお祈りいたします。」と述べた。

ハフオーンガーの発言からは、今回の文化交流に非常に期待している姿勢が窺え、かつ彼が内モンゴルにおける文化事業と関連付けているのがわかる。これと同様に、次に内モンゴル自治区人民政府主席オランフーからも同様の発言がなされ、以上からは、内モンゴルの指導層が、モンゴル人民共和国の文化を受容する姿勢を見て取ることができるだろう。この違いは、前述の北京の文化部長丁西林の発言と比較すれば、より明確であろう。一方、モンゴル人民共和国の発言は、北京や上海と同様に、形式的、かつ公式的なものに過ぎなかったようである。また、オユンはここで五カ年計画について言及しているが、この年はちょうど、中国も国家建設政策として、第一次五カ年計画を実行に移される時期であった。モンゴルは1948年から52年の間、既に第一次五カ年計画を実行したものの、成果は芳しくなく⁷⁶、1953年からは第二次五カ年計画を進めていた。この時期は、モンゴルにとって、外部、とりわけ、中国からの経済的支援を必要としていた時期でもあり、オユンの発言もそれを意識していたのかもしれない。

芸術団は、同日の午後、オランフーに招待され、歓迎会に参加した⁷⁷。そこでオランフーは「優秀な芸術家から成り立つモンゴル人民共和国芸術団がこの度内モンゴルにいらして公演を行うことは、内モンゴル自治区の文学芸術の事業の発展を促進させることと思います。特に内モンゴル自治区の民族文学芸術の事業を更に進展させる手助けになることでしょう。」と演説している⁷⁸。

続いてその日には、内モンゴル歌舞団により、モンゴル芸術団を歓迎するコンサートが披露されたが、これに関しては次節で検討したい。5月24日の夜、モンゴル芸術団は、綏遠省人民政府や軍人、各機関の指導者、芸術関係者など約1,000人の前で、公演開会式を行い、その翌日には、広場で綏遠省の芸術関係者、軍人、小中学校の教師や生徒、商人、回族の人々など、およそ33,000人の前で公演を行った⁷⁹。

75 Öbür mongyul-un edür-ün sonin 1953年5月24日付。

76 鯉淵信一「モンゴル経済と中ソの援助」（浜勝彦編『経済開放下のアジア社会主義諸国』アジア経済研究所、1985年）。

77 Öbür mongyul-un edür-ün sonin 1953年5月24日付。

78 Öbür mongyul-un edür-ün sonin 1953年5月24日付。

79 Öbür mongyul-un edür-ün sonin 1953年5月25日付。

3-2 内モンゴルの著名人、新聞読者、観衆による評価

内モンゴル、フフホトの市民は、モンゴルの芸術団が他の都市で公演を行っている新聞記事を見て、早くから期待を膨らませていたようである⁸⁰。団員のチョグジルマーの回想録によると、「フフホトの人々は、私たちのことを、同胞として涙を流しながら迎えた。家々にチョイバルサン、ユンデン、ナンサルマーの絵が飾られていたのは、どうしようもなく、血を分けた証でしょう。」と話している⁸¹。ユンデン、ナンサルマーとは今回の芸術団の演劇の一つ「悲しみの三つの丘」の中の主人公である。

これは、当時の内モンゴルのモンゴル人にとって、モンゴル芸術団の訪問は決して公式的な交流の意味合いに止まらず、むしろ民族レベルの交流として、主体的に参加していたことを裏付けるものだろう。一方で、モンゴル芸術団の訪問期間中の発言は始終公式的なものであったが、この「同胞」ということばからは、個人レベルにおいて内モンゴルの人々に対する民族間の感情があったことを証明しているのかもしれない。

また『内モンゴル日報（“Öbür mongyul-un edür-ün sonin”）』モンゴル語版（1953年5月25日付）には、「読者の手紙」の特集があり、そこには公演を見た人々から寄せられた投稿が紹介されていた⁸²。以下、その投稿を取り上げて、内モンゴルのモンゴル人の反応を見てみることにしたい。

読者ホリヤグチは、「（前略）あなた方の社会主義内容の、民族の特徴を持った芸術がもたらした成果は中国の芸術文化に影響を与えただけでなく、何より内モンゴルの民族の芸術の発展に絶大な支援となりました。わが内モンゴルの芸術家もあなたたちの作品を努力して学び、新民主主義内容の、民族の特徴を活かした芸術文化を同じ道で発展させていきます。今回私たちはモンゴルの芸術団から学ぶ機会を得ただけでなく、私たちの民族の芸術文化をより進展、創造させ、懸命に励むという勇気をくれました。あなた方の物事を学ぶ勇氣、創造する力をお手本にさせていただきたいと思います。（後略）」と評価した。

また、読者ゴビは「モンゴル人民共和国芸術団の民族の高度な芸術文化作品を見て私たちはとてもうれしかった。ソ連の高度な芸術文化を自文化に取り入れて、それを発展させたこのような具体的な成果は私たち内モンゴルにまさに必要なモデルである。（後略）」と述べている。

この他、『内モンゴル日報』モンゴル語版（1953年5月26日付）において、北京公演のモンゴル人の観衆であったアルダルトは、「（前略）“モンゴル踊り”や“ドゥルブド民間踊り”、“騎手踊り”のダンスは、モンゴル民族が、世間から大分後れているとのイメージからは、大きくかけ離れ、祖国の経済、芸術文化を発展させ、労働による成果を確固たるものにし、

80 前掲 Na.Sayinčoytu, Na.Sayinčoytu-yin бүрin jokiya (4), 1999, pp.181-182.

81 前掲 Ц. балдорж, Түмэн хүрээлж төр соёрхсон гэр бүл, 2003, pp.182-183.

82 Öbür mongyul-un edür-ün sonin 1953年5月25日付。

暮らしを日々向上させているモンゴル人民の状況をはっきりさせた。(後略)」と感想を述べている⁸³。

以上のように、内モンゴルの観衆の評価からは、モンゴル芸術団がソ連（ロシア）の影響のもと伝統文化を巧みに加工し、発展させた舞台作品、とりわけ、楽器や音楽、踊りの作品に対し、鋭く批評しているのが見られた。当時の内モンゴル人にとって、伝統的な民族舞踊とくらべて、彼らの踊りは斬新であり、活気のあるパフォーマンスと受け止められたようである。前述のサインチョグトの意見も踏まえると、内モンゴルのモンゴル人にとって、同じ民族であるからこそ、かつての伝統的な舞踊や音楽が、いかに変化をとげ、進展したのか、実感しやすいといえるだろう。これらを踏まえると、モンゴル人民共和国と内モンゴルの芸術文化は1950年代において、相互に大分異なっていた可能性が考えられる。そして、「読者の手紙」からは、モンゴル芸術団の取り組みに対する尊敬の念が読み取れ、彼らのパフォーマンスを、内モンゴルの民族の文化と結びつけ、モンゴル芸術団に見習うべきとの意見が顕著にみられた。

3-3 モンゴル人民共和国芸術団の内モンゴルでの文化交流

5月23日にモンゴル芸術団がフフホト市に到着した夜、内モンゴル歌劇団によって歓迎公演会が行われた⁸⁴。内モンゴル歌舞団とは、1946年に張家口市において成立した内モンゴル文工団を前身とし、歌やダンス、演劇を行う芸術団体であり、1953年に内モンゴル歌舞劇団と改称している⁸⁵。当初、団員はモンゴル族の青年を中心に構成され、そのほかに漢民族、満族などが加わっていた⁸⁶。ここでは、内モンゴル歌舞団のコンサートの内容と芸術家たちの文化交流から、内モンゴルへの影響について検討したい。

まず、コンサートでは、歌やダンスが披露され、内モンゴル若手歌手オドンゴワー、長調歌手ボヤンデルゲル、ラ・ジャブらが歌を披露した⁸⁷。また、ダンス部門では、「オロチョン踊り」、「トルグート踊り」、「剣舞」、「オルドス踊り」、「アハムベイ踊り」が披露された。このうち「トルグート踊り」は、前年9月末にモンゴル人民共和国で開催された「モンゴル・中国の友好の10日間」のイベントに、内モンゴル歌舞団の若手の歌手やダンサーが招かれ、そこでモンゴルの芸術団から教わるという経緯があった⁸⁸。一方、「オロチョン踊り」と「剣

83 Öbür mongyul-un edür-ün sonin 1953年5月26日付。

84 前掲 Na.Sayinchoytu, Na.Sayinchoytu-yin бүрин jokiya (4), 1999, pp.182-186.

85 その後、1956年に内モンゴル歌舞団と改称し、現在に至る。シンジルト「オランムチル現象にみる内モンゴル・インパクト」(小長谷有紀、川口幸大、長沼さやか編『中国における社会主義的近代化—宗教・消費・エスニシティ』勉誠出版、2010年)を参照。

86 烏蘭傑『蒙古族音楽史』内蒙古人民出版社、1998年、334-337頁。

87 前掲 Na.Sayinchoytu, Na.Sayinchoytu-yin бүрин jokiya (4), 1999, pp.182-186.

88 同書、pp.183-184.

舞」は、内モンゴル各地のモンゴル民族の民間の踊りを参考にして、舞踊家の賈作光が創作した踊りであった⁸⁹。なお、サインチョグトは、日記において「オロチョン踊り」は、内モンゴルの多民族の生活の向上、新しい生活を器用に表現した踊りであり、「剣舞」は祖国を守るため、日々訓練を重ねる軍隊を連想させた踊りだと紹介している⁹⁰。

公演後、モンゴル芸術団団長のオユンは、内モンゴル歌舞団の団長ブフーに対し、「あなた方は偉大なる毛沢東の賢明な民族政策のもと、内モンゴルの芸術を上手に発展させました。」と嬉しそうに話したという。また『ウネン』紙（1953年6月13日付）の記事のなかで、団長オユンは「私たちは民族の形式で発展しつつある兄弟モンゴルの人々の新しい芸術を、満ち足りた気分で鑑賞した。」と報告している⁹¹。

さらに5月25日の午前中、綏遠省の芸術関係者とモンゴル芸術団の間で文化交流会が開かれた⁹²。今回の交流会に先んじて、4月24日には、モンゴル芸術団と北京の芸術関係者の間で、音楽、踊り、サーカスなど3つのグループに分かれて、主にモンゴル芸術団に学ぶという形で交流会が進行され⁹³、5月11日には、上海の芸術関係者100人余りとともに、同じく3つのグループに分かれて、雑談の形式で交流会を実施していた⁹⁴。今回のフフホトの交流会では、歌、踊り、作曲、楽器、編集、舞台劇の6つのグループに分かれ、主にモンゴル芸術団から学ぶという形で進められた。具体的には、歌に関しては馬頭琴演奏に合わせて歌うこと、踊りに関しては「モンゴル踊り」「ドゥルブド民間踊り」に主眼が置かれたという⁹⁵。ナ・サインチョグトの日記でも、内モンゴルの若いダンサーや歌手が、モンゴル芸術団から多くの踊りや歌を学んだことが記録されている⁹⁶。ナ・サインチョグトはより具体的に、彼らが「ドゥルブド民間踊り」や「騎手踊り」を学び、さらに、歌手チョグジルマーの「かわいい我が祖国よ」や、若手歌手ジャグダスレンの「すべてを祖国に捧げる」、三重唱「牧民の試合」などの歌を習っていたことが記されている。そのうえで、ナ・サインチョグトの日記は「こ

89 賈作光（1923-2017）満族、舞台表現芸術家、振付師。1947年から歌舞団の前身である内蒙古文工団に所属し、53年の時点では内蒙古歌舞団の副団長であった。郝維民主編『内蒙古通史－中華人民共和国時期的内蒙古自治区（四）』第7巻、人民出版社、2011年、2393-2396頁を参照。なお、賈作光の没年については、下記を参照した。「著名舞蹈家賈作光逝世 数百舞蹈界人士為他送行」人民網。2017-1-13. (people.com.cn). (2021年1月閲覧)。

90 “新しい生活”とは、当時の作品の紹介によく使われたことばであり、ここでは、帝国主義や封建的勢力がなくなり、社会主義の道へ進む、新中国の生活を指すと考えられる。なお、日記の記録は、前掲 Na.Sayinchoytu, Na.Sayinchoytu-yin būrin jokiya (4), 1999, pp.183-184を参照。

91 “Үнэн” 1953年6月16日付。

92 Öbür mongyul-un edür-ün sonin 1953年5月26日付。

93 『人民日報』1953年4月25日付。

94 『上海新民報晚刊』5月12日付。

95 Öbür mongyul-un edür-ün sonin 1953年5月26日付。

96 前掲 Na.Sayinchoytu, Na.Sayinchoytu-yin būrin jokiya (4), 1999, pp.185-186。

これらの美しい歌や踊りは内モンゴルに広く伝わり、多くの人々に好まれ、広まることは間違いないだろう。」と締めくくられている⁹⁷。

以上、1953年におけるモンゴル芸術団のフフホト公演を中心に検討してきたが、内モンゴルの指導層や、観衆、芸術家らが積極的な姿勢で交流に取り組んでいたことが明らかになった。それと同時に、モンゴル芸術団のパフォーマンスが、内モンゴルの人々に多大なインパクトを与えたことは、観衆の評価からうかがえる。また、芸術団に同行したナ・サインチョグトは、モンゴルに留学経験があり、自らも文学者であったことから、団員たちと芸術家としての視点から交流を深めただろう。ナ・サインチョグトが、今回のモンゴル芸術団の訪中公演を日記に記したことで、内モンゴルの人々に彼らの活躍の記憶を残すことができた。その意味で、ナ・サインチョグトはモンゴル芸術団と内モンゴルをつなぐ存在であったといえよう。

おわりに

本稿では、1950年代初頭、モンゴル人民共和国芸術団が中華人民共和国において、はじめて実施した大規模な公演と、それにともなう文化交流活動について考察し、以下の点を明らかにすることができた。

まず、両国の文化交流は、ソ連の影響下にある社会主義国家がともに団結を強化しはじめていた時期に実現した。中国にとっては、他の社会主義国との外交関係を通して、新中国のイメージの向上や、社会主義国家としての地位確立を意識していた時期でもあった。そのため、中国は、モンゴル芸術団に対して最高級の接待をおこない、両国間の文化交流は、好調な滑り出しをみせた。

つぎに、モンゴル人民共和国と内モンゴルの人々の文化交流は、中国とモンゴル両国の国家間の文化交流の一環としておこなわれ、そのことによりモンゴル民族の文化交流が可能となったといえる。モンゴルから派遣されたモンゴル芸術団は、ロシアやソ連の芸術家や音楽家から、直接教育を受けたものが多くを占め、人民共和国で活躍する芸術家たちであった。彼らの舞台公演は、モンゴルの伝統文化と西洋の芸術をうまく融合させたものであり、とりわけ、内モンゴルの人々にとって、非常に斬新な内容であった。また、文化交流事業を通して、内モンゴルの指導者らは、モンゴル芸術団の訪問公演を重視し、文化を受容する姿勢があったことが明らかになった。それは、指導者らの発言やフフホトにおける文化交流会から、内モンゴルの指導者や芸術家らがモンゴル芸術団の専門技術を重視していたことがうかがえる。以上検討してきたように、モンゴル人民共和国と内モンゴルの芸術文化は1950年代において、相互に大分異なっていた可能性が指摘できる。今回のモンゴル芸術団の公演を通

97 前掲 Na.Sayinchoytu, Na.Sayinchoytu-yin bürin jokiyal (4), 1999, pp.185-186.

して、内モンゴルの人々は、内モンゴルの文化事業をどのように発展させていくか、考えさせられるきっかけになった。そして、モンゴル芸術団が、内モンゴル歌舞団や芸術関係者に歌や踊りを伝授したことをある程度、明らかにすることができた。これらモンゴル人民共和国の手法が、内モンゴルの文化事業において、どのような形で取り入れられ、発展、定着していったのかについて、今後の課題としたい。